

第3種郵便物認可

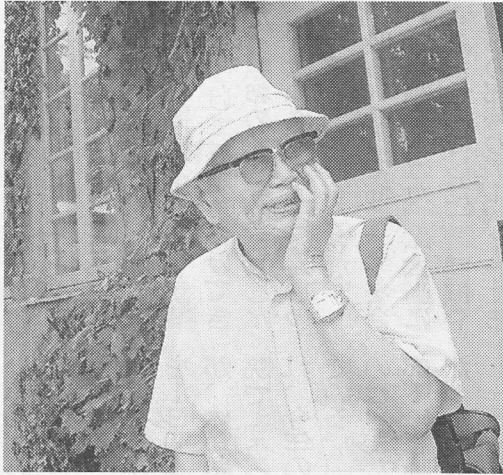
1世紀近くにおよんだハンセン病の隔離政策の問題を、元患者らの証言でつづる映画「もういいかい〜ハンセン病と三つの法律」が18、24日に西宮市で上映される。同市在住の映画プロデューサー、鶴久森典妙さん(65)制作の作品で、いまだに根強く残る偏見の解消を訴えている。

ハンセン病 偏見なくして

18日・24日 西宮で上映

ハンセン病は感染力の弱い病気でありながら、顔や手足に変形や障害が残ることから、患者や家族が敵しい偏見・差別にさらされてきた。国は1907年に法律を定め、患者を全国13カ所に設けた国立療養所に収容。治療薬ができた後も、こうした隔離政策を96年の法律廃止まで続けた。

その後も熊本県のホテルで元患者の宿泊が拒否されるなど、鶴久森さんは問題は終わっていないと感じていた。映画制作でコンビを組んできた監督の高橋一郎さん(59)も同じ思いだった。撮影は2007年にスタート。国内7カ所と植民地時代に韓国・小笠原島に開設された



映画の中で体験を語る元ハンセン病患者の男性(©「もういいかい」映画製作委員会)

療養所で、元患者17人と療養所の職員ら5人に取材。入所時に裸にさせられて消毒液を満たした風呂に入らされたことや、無理やり断種や堕胎を強いられたこと、亡くなった入所者を入所者自身が茶毘に付したことを語った。

隔離政策の悲劇 元患者ら証言

タイトルは、映画の最後の場面に出演する元患者が、自らの心情と重なるとして紹介した川柳から取った。「もういいかい 骨になっても まあだだよ」。死んで遺骨になっても引き取る親族がおらず、故郷に帰れないつらさを嘆いた。

映画は12年に完成した。療養所では入所者の高齢化が進み、隔離政策がなくなっても地域社会に戻るための支援は十分でない、と鶴久森さんは言う。「二度と同じことを繰り返さないために負の歴史から目をそらさず、向き合ってほしい」

上映は、18日午後6時から西宮市高松町の市男女共同参画センター、24日午後2時15分と6時15分から同市池田町のフレンテホール。いずれも無料。問い合わせは映画製作委員会(078・3333・8690)へ。(千種辰弥)